

『就実論叢』第52号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2023年2月28日 発行

幼児の好奇心・探究心を支える保育の展開

－遊びの中で好奇心・探究心を生み出す感情体験の 可能性に着目して－

**Development of Childcare that Supports the Curiosity and Inquisitiveness of Young
Children : Focusing on the Possibility of Emotional Experiences that Creates
Curiosity and Inquisitiveness in Play**

六 車 美 加

幼児の好奇心・探究心を支える保育の展開

－遊びの中で好奇心・探究心を生み出す感情体験の可能性に着目して－

Development of Childcare that Supports the Curiosity and Inquisitiveness of Young Children : Focusing on the Possibility of Emotional Experiences that Creates Curiosity and Inquisitiveness in Play

六車美加 (幼児教育学科)

MUGURUMA Mika

キーワード：好奇心・探究心・心の動き・体験

1. 研究の背景と目的

1. はじめに

幼児は身の回りの様々な環境に興味をもって主体的に関わりながら、発達に必要な体験を得て成長していく、と言われている。保育現場では、幼児が自分の興味や関心のあることに対して、疑問や願いをもって試行錯誤したり調べたりすることで解明したり実現したりする姿が見られるようになる。ちょっとした気になること、何気なく不思議だと思ったこと、もっとうごきたいということ等に対して自分なりのやり方でアプローチしていくようになる。幼稚園教育要領(2018)によると、「幼児はこれらの環境に好奇心や探究心をもって主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していく」とある¹⁾。

一方、高等学校では、2022年度より「探究の時間」の科目が導入されている。自分で考え、解決する力や、粘り強く追究する力であるこの資質・能力は、これからの時代に欠かせないものであり、年齢は違っても幼稚園から高等学校教育までの教育現場で意識的に経験を促す必要があると言えるのではないだろうか。この探究心小学校以降の教育から始めるのではなく、幼児期から年齢や発達に応じて経験しその芽生えや基礎が育まれていくものであると捉える。そのような資質・能力の基盤には、幼児のもっている資質や魅力のある環境、教師の援助や環境構成等が総合的に関連する大切さがあると考えられている。

2. 好奇心と探究心

保育現場において、幼児は安心感を得て自分の居場所をもつようになると、身近な環境から気になることを見付け、「何かな」「面白そう」「不思議だな」など感じ、心を動かすようになる。好奇心旺盛と言われるこの時期の幼児の姿として、好奇心を見取る具体的な姿を、「身

近な事象に関心をもちじっと見つめる姿、やってみたい！と思いをもち身を乗り出したり表情が変わったりする姿、なぜ？と疑問をもち、周囲の人に尋ねたり調べようとしたりする姿」²⁾と定義する。

また、探究心については、神長・堀越・佐々木（2018）が述べているように、「興味や関心、好奇心を動力として、物事の本質に迫ろうとする心」「もっとやってみたい、もっと知りたい、こうするとどうなるかな？と不思議さや分からなさの謎を確かめようとする心」³⁾と定義する。

3. 研究の目的

昨年度、研究したテーマである「幼児の探究心を支える保育の展開」において、3年保育の5歳児の事例を用いて論考した。この中で幼児が生み出した遊びの中から事例を抽出し考察したことにより、一つの可能性として次の事項を導き出している。それは、「遊びを生み出す過程で、必要感をもって幼児自らが教材・用具を活用することは探究心の芽生えにつながる」⁴⁾ということである。その上で大切にしたいこととして、次の4点、1) 幼児の興味関心に応じた環境構成、2) 幼児らしい発想と豊かな感覚、3) 教師と幼児の間に生じるずれへの対応と幼児理解、4) 幼児の好奇心・探究心を誘発する教材・用具、があがってきた。ここで取り上げたのは、3年保育5歳児の実践事例である。探究心の芽生えは、教育要領の中で「5歳児の終わりまでに育ってほしい姿」にも位置付けておるが、5歳児で急には育つものではなく、3歳児、4歳児の時から育まれるものであることを踏まえ、指導計画や教師の援助を行わなければならない。

昨年度の研究で抽出し分析したような幼児の姿になるには、3歳児の頃からどのような体験を積む必要があるのだろうか。初めての集団生活を送る幼児にとって園生活が安定したものであると、周りに目が向き、いろいろなことに興味をもちたり気付いたりすることも増えるのではないだろうか。そこで、一点目の仮説を「安心感をもち、五感を働かせることで、好奇心を発揮することができる」とした。また、「教師や友達との温かな関わりの中で、いろいろな感情を伴いながら繰り返し遊ぶことは、探究心の芽生えにつながる」ということを二点目の仮説とした。

そこで、本研究では3年保育3歳児の園生活に焦点を当てて実践事例を抽出し、好奇心や探究心が引き出された状況や教師の援助、環境構成などについて考察分析することで、3歳児における好奇心や探究心を支える保育の展開の特徴について論考する。

II. 研究の方法

本研究では、著者が保育現場で以前に取り組んできた3年保育3歳児クラスの5月～6月の実践の中から、幼児が出会った遊びや出来事に関して好奇心や探究心の芽生えを見取ることができたと捉える事例を抽出し分析する。特に、前述の仮説1・仮説2に基づいて考察で

きるものを抽出する。

Ⅲ. 実践事例

1. 実践①「そうだ！」 3歳児（5月）

〈ブロック遊びの場〉

A児は、2人の幼児がB型ブロックを上になん個ずつはめ込んで積み重ねていく様子を少し離れた所から、視線をそらすことなく身動きもせず、じっと見つめている。ブロックは少しずつ高くなり、幼児の背丈を越すほどの高さで、手で支えなければ倒れるほどになっている。そのとき、A児が幼児椅子を取りに行き、抱えて戻ってくると、高く積まれたブロックのそばへ持っていく。A児はブロックを一個手に持ち、幼児椅子に乗って、積まれたブロックの頂点に新たにブロックをはめ込もうと試みる。(写真1)

【考察】

A児は友達の遊ぶ様子を見て驚くと共に興味を持ち、目が離せない状態になっていると捉える。すぐには参加せず、ずっと見入っている様子から、ブロックがどこまで高くなるんだろうと見守っているのか、それとも、もっと高くするにはどうすればいいんだろうと思いを巡らせているのか、教師は思いを探りながらA児の様子を見ていた。幼児椅子を持ってきて台として使用する姿から、もっと高くするには今のやり方は難しいと感じ、どうすればいいか考え、思いついた方法を実際にやってみようという行動に移したと見取る。



写真1

この事例中のA児に関して、「興味」「模索」「ひらめき」という感情の動きを捉えることができ、もっとブロックを高く積めるようにするための探究心が見られる。

2. 実践②「ピンポンしたらいい？」 3歳児（6月）

〈積み木遊びの場〉

積み木で家を作り、B児、C児、D児、E児がおうちごっこをしている。そこへF児が小走りで近付いてきて入ろうとすると、B児が「入っちゃだめ！」と言う。F児は近くにいた教師の顔をじっと見る。教師が「だめなの？」と代わりに尋ねると、4人はそれぞれ固い表情をしたり黙ったりする。そこで、どうすれば入れるかと教師もF児と一緒に考えていると、F児は落ち着かない様子で、「えーっと。んーと…ピンポンしたらいい？」と言う。4人は一瞬、驚いたような表情をして沈黙の後、「いいよな」と顔を見合わせる。F児は大きな声で「ピンポーン！」と玄関チャイムを押す仕草をしながら積み木の家に入り、

遊び始める。

【考察】

F児が小走りで積み木の家に近寄る姿から、面白そう、入って遊んでみたいという思いを見取ることができる。既にそこで遊んでいた4人の幼児は、固い表情からも、入らないでという思いだと見取る。もしかすると、「入れて」という言葉を待っていただけかもしれない。教師は、その場ですぐに仲介することはやめ、F児と2人で入る方法を考えることにする。目の前で2人が困った、と考え込んでいても4人からいいよ、という言葉は出てこない。しかし、F児のどうしても入りたい、という気持ちに加え、そばで一緒に方法を考える教師の存在もあり、F児の気持ちは持続し、積み木の家に入るための方法を探究することができたと捉える。

この場面におけるF児の感情の動きとしては、近寄っているときの、面白そうという「興味」「親しみ」から好奇心がうかがえる。入りたい気持ちをそのまま行動で表すが周りから拒否され、「落胆」する。そこから、それでも入りたいという気持ちに支えられて入るためのアイデアを諦めずに考える「模索」へと思いをつないだ、と考えられる。「ピンポン！」と大きな声で言っているところから、これで大丈夫、という「自信」または「安心感」が得られたのではないかと考える。

一方、周りの4人の幼児は、F児の発言に驚き、それならいいという納得した表情でF児を受け入れていた。

3. 実践③「びったりなのー」 3歳児（6月）

G児とH児はダンゴムシの面を作ってかぶり、積み木でダンゴムシの家を作ったり、「ダンゴムシ体操」をしたりして遊んでいる。教師が段ボールで作った草（高さ30cm×幅180cm程度）（写真2）を3個用意しておく、2人は丸く囲むように床に置いてダンゴムシの家に見立てて、その中に座って笑顔で顔を見合わせる。その様子に気付いて周りの幼児も入りたそうな言動をとるが、「だめー！」と抵抗する。「みんなのよ」「代わりばんこよ」等の言葉が周りから聞こえてくると、G児「これは2人のお家なのー！」H児「びったりなのー！」と両手を広げながら大きな声で言う。

【考察】

ここでは、段ボール製の草に好奇心を抱き、丸く囲むことを思いついて使って遊んでいたが、周りの幼児も気になって使いたくなる状況になった。どうすれば周りの友達が入ってこないか、2人だけで使えるかということに必死になっていることがうかがえる。何とかして草の家を守ろうとするあまり、思わず「だめー！」と口走るが、それで周りが引き下がることはなかった。経験上、「だめ」では通用しないと悟った2人は、さらに周りを説得する手立

てを考える。そこでとっさに思いついたのが上記の2人の発言だったと捉える。

2人の感情の動きとしては、興味や親しみという楽しい雰囲気から、周りの幼児が入ろうとすることで一気に「焦り」「戸惑い」が生まれたが、そこから、どうすれば草の家を守れるかについて探究心を働かせたと見取る。

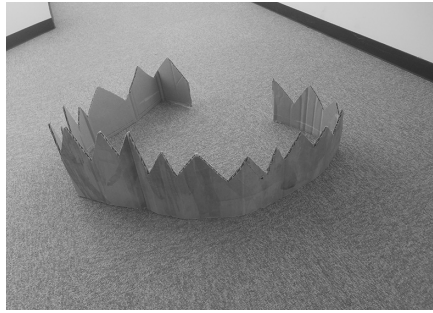


写真2

4. 実践④「水が出ない」 3歳児（6月）

水遊びの場で移し替え遊びをしている。I児は、プリン空きカップを使い、たらいから細長い傘袋（ポリエチレン製）へ水をこぼさないよう移し替えている。（写真3）傘袋の口は狭いので慎重にゆっくりと水を注いでいる。袋に水がたまったところで教師が袋の口を結んで渡すとI児は、水の入った傘袋を両手で袋を握って力を入れたりゆるめたりする。「冷たいよ」「ムニムニしてる」「プニプニかな」と笑顔になる。それを見て「やりたい！」と数名の幼児が同じように傘袋に水を入れ、それを持って遊び始める。遊ぶうちに、I児の袋の脇がわずかに裂けて小さな穴が開き、袋の側面から水が細く飛び出してくる。「見てー！」とさらに喜ぶ。細かいシャワーのようになったのを見て、周りの幼児は、はっとした表情になり、さらに力を込めて袋を握ったり曲げたりし始める。「分かった、Iちゃんみたいにしたいのかな」と教師が尋ねると「そう！」と声をそろえる。一人、また一人と、少し破れ穴を開けることに成功するが、J児の袋はなかなか破れない。「出ないー」「水が出ないー」と言いながらもやり続け、教師が「出ないね」「もうちょっとかな」と見守る中、小さな穴を開けることに成功してJ児は歓声をあげる。

【考察】

水遊びの場に新たに傘袋を用意することで、幼児は興味や好奇心をもって水を貯め始めた。細長い袋にどんどん水が貯まっていく様子に「面白さ」や「親しみ」を表した。さらに、水が入った傘袋は、触ってみるとその感触が幼児にとって興味深く面白く感じられ、面白がる幼児に気付いた他の幼児も遊びに加わっていった。

さらに触って遊んでいるうちに袋がわずかに破れ、押さえたり曲げたりするとそこから水が細く飛び出してくる現象に沸き、好奇心はさらに発揮されていった。やってみたい思いがさらに膨らむとともに、周りの幼児へと広がっていった。その中で、I児と同じように穴を開けたいと



写真3

いう願いをもったJ児は、周りの友達が穴を開けて喜ぶ中、諦めずに穴を開けようと四苦八苦（試行錯誤）する。そこには、やってみたい、でもできない、やっぱりできない、でもや

めてくれない、という「葛藤」や「焦り」、「根気」を見取ることができる。

水を入れる、水の入った袋を触る、破れた所から水が飛び出してくる、というように、対象に関わる中で次々と新しい展開が目の前に起こる面白さが子どもたちの期待を高め、好奇心や探究心を引き出したと考える。

5. 実践⑤「私が乗る！」 3歳児（6月）

水遊びの中で、空きカップやひしゃく等を使い、たらいから70Lポリ袋へ水を移し替える遊びをしている。（ポリ袋は、水遊び用のテーブルの脇に貼り付けて固定してある。）数人の幼児が入れ替わりながら移し替え遊びをし、ポリ袋が水でいっぱいになったところで机から剥がし、教師が袋の口を固く結んでマットの上に置く（写真4）。K児もその遊びに加わり、袋を手で押さえたり転がしたりした後、袋の上に馬乗りになって遊び始める。袋にまたがって遊び始めるK児を見て周りの友達に驚いた表情になったが、次に目を輝かせる。すぐにL児が「私！」と、ポリ袋の上に乗る、K児と取り合いになる。「私が乗る」「私よ！」と言いながらも、2人とも袋から落ちないようにバランスを取っている。そのうち、2人の動きが一瞬止まる。互いの手を取り合って袋の上に乗っていることに気付き、声を出して笑い合う。

【考察】

偶然であるが、友達と2人でバランスを保ってポリ袋に乗っている状態になったことに「面白さ」や「嬉しさ」を感じていると見取った。

初めは、水の入った巨大な袋に興味をもちつつも、どうやって扱うか戸惑う幼児も多かった。触れるだけでなく、全身で乗ったK児に驚き、乗ることができるという気



写真4

付きと、やってみたいという羨ましさから、K児とL児の取り合いが始まった。みんなで使うという経験を十分にしていない3歳児クラスの幼児にとって、自分の思うように使えない経験、取り合いになる経験も時に必要である。教師が見守っているうちに、幼児から状況を笑い飛ばす様子が見られたことから、2人で乗る面白さを感じ、新たな遊び方を発見することができたと捉える。取り合いを直接解決するには至らなかったものの、このような偶然の出来事から探究心が芽生えることもあるかもしれない。

6. 実践⑥「ビニールの屋根」 3歳児（6月）

70Lポリ袋を開いてつなぎ合わせてシートを作り、四隅を柱に結び付けて張る。幼児の背では届かない高さに設置し、その一角からホースで水を流し込み、シートの上に水が貯まるようにしておく。（写真5）

水遊びの場面で、シートの上側にホースを使って水を貯めていくと、幼児が集まってきてシートを見上げ、水の流れる様子や貯まっていく様子に見入ったり、「きれい！」と声をあげたり飛び跳ねたりして喜ぶ。水がたまる程、たわんで下がってくるので、こぞってジャンプをして触ろうとする。大きく触り揺らすことができると、ビニール上の水が動く。「うわー！」と声があがる。触ってはその様子を眺め、眺めては触る、を繰り返す。また、ビニールに傾斜がついて端から水がしたたり落ちてくると、その下に入り込み、体に当てたり、下で容器やじょうご数種類を組み合わせて待ちかまえ、水を集めようと試みたりする様子が見られる。

【考察】

今回使用した70Lポリ袋の厚みは、水の感触が手に伝わりやすい、水の重みでたわんだり適度に傾いたりするという点で程良い薄さであった。その性質により、厚手のビニールシートでは味わえない体験ができた。好奇心を働かせ、ジャンプをしてビニールに手が届いた時の水の動きを不思議がったり、探究心をもって、垂れてくる水を受け止める方法を試したりして心を揺さぶられていた。



写真5

7. 実践⑦「こっちが前！」 3歳児（6月）

4歳児クラスの幼児が段ボールで作った電車を使って電車ごっこをしており、3歳児クラスの幼児を誘って乗せてくれていた。（写真6）乗客として繰り返し電車に乗せてもらい、喜んで3歳児クラスと4歳児クラスをつなぐ渡り廊下を行き来して遊んでいた。

M児が運転したいと言うので、教師も一緒に4歳児クラスに行き、頼んで電車を一両（段ボール一箱分）借りてくる。いざM児が電車に乗って使おうとすると、N児が走り込んで電車に入り、ぎゅうぎゅう詰めの段ボールの中で2人がそれぞれ反対の方向に進もうとして踏ん張っている。「私が運転手！」「僕が運転手よ！」「こっちが前！」「こっち！！」と、どちらも運転しようとしているので、話がまとまらない。教師が「どうしたらいいかな」「電車が壊れそうよ」「2人共運転手さんが好きなんだね、一緒だね」等、いろいろな声を掛けるが、それぞれの行き先をじっと見て出発しようとしている。「先生も乗りたいな」「お客さんも楽しそう」等、教師が話していると、「お客さんになる…」とM児が言う。「一緒にお客さんになろうね」とM児に話しかけ、「それで、その次はMちゃんが運転手でNちゃんがお客さんだね」と2人に伝える。2人は笑顔で電車に乗ってゆっくり走らせる。

【考察】

電車が好きな幼児が多く、好きなものを生かした遊びに興味をもち、参加したくなる様子が見られた。同じように使いたいから取り合いになることもある。楽しさだけでなく、葛藤や苛立ち、困惑、行き詰まる気持ち等、次々に心が揺れ動く。しかし、最後には、使いたい・遊びたいからこそ一緒に使ったり順番に使ったりする方法を選択することになったと見取る。どうすればこの遊びを続けることができるかと自分なりに探究したと捉える。



写真6

8. 実践⑧「しゅっぱーつ！」 3歳児（6月）

4歳児クラスで電車を借りて遊んでいたが、しばらくして自分たちも電車を作りたいという声があがる。

「電車を作る！」「段ボールがほしい」という声に答え、一辺を切って平面にしていた段ボールがあったので、その開いた状態の段ボールを教師が渡すと、その状態のまま電車に見立て、数名で脇に抱えて「しゅっぱーつ」と歩き出す。笑ったり歓声をあげたり、電車の音を表現したりして遊ぶ。次に、ペンで窓を描いたり模様を描いたりする、降車ボタンを作って貼り付ける等して電車らしく作っていく。乗りたい時に乗ったり、降車ボタンを押して降りたりして、入れ替わりながら電車を走らせている。（写真7）

繰り返し遊ぶ中で、「もっと長くしよう」「つなげる！」と言い始める。教師は、長いなと思いながら、ガムテープを用意し、貼るのを手伝う。幼児ははりきって貼り合わせていく。（写真8）喜んで長い電車を走らせようとするが、2倍の長さになった電車は案の定、扱いにくい。誰も持っていない箇所が出てきて引こずったり曲がり角はうまく曲がれず引っ掛かったりして走らせにくく、使わなくなる。「元に戻す？」と教師が尋ねると、一堂うなずく。ガムテープをはがし、元に戻して遊びを続ける。



写真7

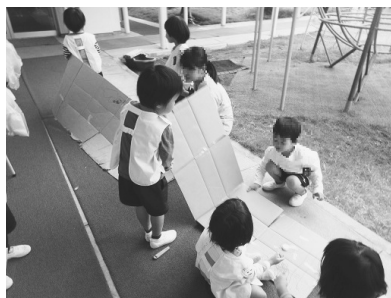


写真8

【考察】

段ボールが手に入っただけで嬉しく、すぐに電車に見立てて遊びに使う姿が見られた。段ボールが平面の状態でも、嬉しそうな表情と表現で、乗っている気分を味わっているを見取った。知らない人からすれば、一見、平面の段ボールを運んでいるだけのようだが、それは子どもたちにとって、電車以外の何物でもない。

電車の形を柔軟に捉える幼児の発想により、平面のままの段ボールを使用することで、空間が限定されず乗車する人数も柔軟に対応でき、扱いやすく安全であるため、乗りたい、一緒に乗りたい、という気持ちが満たされた。一緒に使える教材であることに意味があった。

楽しくなると、もっとつなげたい！という願いが生まれたが、長ければいいというものではなく、実際にはうまくはいかなかった。しかし、思いついたことを実際にやってみる経験になったと捉える。ここでの感情の動きとしては、長い電車だともっと楽しくなるという予想で、友達と楽しそうに貼り合わせる経験をすることができたので、失敗という感覚はなかったと見取る。元に戻すことを提案したことで、遊びは継続した。

9. 実践⑨「ICOCAカードで乗るんよ」 3歳児（6月）

実践⑧のその後、4歳児クラスと同じ型で、さらに一箱分で作った電車を一人乗りということ提案し、安全面に配慮して3歳児クラスでの電車遊びが展開される。1人乗りの電車で遊ぶことができるように、段ボール箱の底とふた部分を折り込んだものを5つ用意しておく。

幼児は1人乗りの電車で嬉しそうに遊びながら、「お母さんと乗ったんよ」「乗ったことあるよ」と電車に乗った経験を教師に話す。さらに、P児が「運転するところを作りたい！」と言う。P児は、制作コーナーにあった空き箱や曲がるストロー等を使って運転ハンドルを作ろうとする。その様子に他の幼児もすぐに興味をもち、同じように作って1人乗りの電車の内側に貼り付けていく。

また、1人用電車ではあるが、連なって電車を走らせる様子が見られるようになる。電車をつなげたいという気持ちが再び自然と生まれ、教師はついにつなげる決断をすることになる。箱をつなげて貼り合わせ、2両の電車を作る。(写真9)

一人で運転しているときは走って運転していた3歳児も、2両目に客を乗せると、とたんに安全運転になり、みんな必ず歩いて運転をする。そして、降車ボタンをつけたり切符をつくったりする。さらに、「ICOCAカードで乗るんよ」というN児の発言から、空き箱をカードリーダーに見立てて貼り付けたりICOCAカードを作ったりするようになる。(携帯電話ケースも作り、その中に入れていた。)

【考察】

路面電車で通園している幼児や、乗り物が好きな幼児もおり、家庭で電車に乗った経験の

ある幼児も多いという背景があった。そのような生活経験を基にして、遊びに生かすことができたと捉える。P児のように、降車ボタンや、交通系カードなどを、身近な廃材を使って組み合わせて作るアイデアも出てきた。もっと遊びが面白くなるように探究する姿が見られた。

また、1人乗りの電車の時と違って2人乗りで運転手と乗客になって遊ぶ電車になってからは、必ず歩いて運転するようになったことから、客である友達を気遣う様子が見られた。

生活経験が生かされ、同じような体験があることで遊びがさらに楽しくなるとともに、友達の存在が大きかった。



写真9

IV. 総合考察

3歳児の実践事例から、幼児の好奇心や探究心を支える3歳児の保育の展開について、仮説1, 仮説2に基づきながら考察する。

1. 仮説1に関して

安心感をもち、五感を働かせることで、好奇心を発揮することができる

～使ってみたくなる遊具や用具～

1) 友達を楽しそうに使っている遊具や用具

事例②の積み木の家や、事例④の傘袋、事例⑤の70Lポリ袋等、友達を楽しそうに夢中になっている遊びや行動が気になり、好奇心が刺激されている。宮里（2018）が指摘しているように、一緒に楽しむ友人がいて、感動が広がり興味が持続する⁵⁾ことから、いいな、やってみたい、自分も使ってみたい、と興味が広がるだけでなく、さらに一緒に使ってみよう、一緒に遊ぶと楽しい等と、経験が豊かになることが分かった。

2) 感覚を刺激される材料や素材

事例④や事例⑤に出てきた水のたっぷり入ったビニール袋を幼児は持ったり上に乗ったりして、手や全身の感覚でその感触を味わうことで、感動したり不思議さを感じたりして心を動かし、好奇心を発揮していた。

3) 見たことのないもの・こと、使ったことのないもの

事例①の高く積み上げられたブロックは初めて目にするできごとであり、幼児は驚き、目が離せなくなっている。佐々木（2018）も述べているように、子どもは未知なるものや目新しいもの、動くものや何かを発するものなどに対して好奇心をもつ⁶⁾め、心動かし、「ここ

からどうなるんだろう」と注意深く見ていると捉えられる。

また、事例③の草が初めて遊びの場に用意された際、これを使ったら面白いのではないかと、楽しくなるのではないかと、好奇心と共に期待が高まっていることが見て取れる。

4) よく分からないもの・こと

事例⑥のビニールの屋根は、初めて見るものであり、まず「何だろう」と注目していた。そこに水が流れていくという現象により、「どうなるんだろう」という好奇心が沸いてくる様子を見取ることができた。用途のはっきりしているものだけではなく、得体の知れないものの存在や変化する状態が幼児の興味を引いている。

2. 仮説2に関して

教師や友達との温かな関わりの中で、いろいろな感情を伴いながら繰り返し遊ぶことは、探究心の芽生えにつながる

～3歳児にとっての感情を伴う体験～

1) 気になる現象・強い思い

事例①のブロック遊びのように、友達がしている遊びや現象に気付いたことで、驚きから興味や好奇心が膨らみ、そこから「もっと高くしてみたい」「どうすれば高くできるか」という思いを強くもったことが原動力となり、探究する気持ちにつながったと捉える。自分のこととして思いを巡らし、模索したことで、方法をひらめくことができている。

事例③のダンゴムシごっこにおいても、「どうしても使いたい」という強い思いが伺える。共同の用具は代わり合って又は一緒に使えるようになるのが望ましいとも言えるが、ここでは、初めて使う魅力ある用具で存分に遊びたいという強い思いから、どうすればこの状況を乗り切れるか探究しているとも言える。

2) 感覚を刺激される材料や素材 変化のある環境構成

事例④⑤⑥でいろいろなビニール袋に水を入れて遊ぶ楽しさを味わった、形や大きさの異なるいろいろなビニール袋が遊びの場に用意されると、その都度、今度はどのようにして遊ぼうか、扱うかという探究心が見られた。楽しかった経験や、自分なりに工夫して面白かった経験等が基になり、変化に対応したり探究したりする姿につながったと捉えられる。

3) 見たことのないもの・扱ったことのないもの、初めて経験する場面、よく分からないこと

事例⑧⑨では、4歳児の電車遊びの楽しさから、電車を作りたい気持ちが広がり3歳児なりの探究心が見られた。4歳児の電車と同じ形ではなくても電車に見立てることができる柔軟さ、一緒に遊びを楽しめる友達の存在がきっかけとなり、もっと楽しくしたい、知ってい

る電車にもっと近づけてみたいという探究心が発揮され始めていた。

4) うまくいかないこと

事例②では、遊びに入れてもらえない経験から、それでも何とかしようと真剣に考える力を発揮しようとする姿を見取ることができた。

また、事例⑦で電車の取り合いになっているが、集団生活の中では自分のタイミングや希望がかなわない場面に出会うこともある。怖い・不安・悲しい・腹立たしいなどのネガティブな感情を立て直したり乗り越えたりする体験が重要⁷⁾と佐々木(2018)が述べているように、取り合いや気持ちを調整する経験をしながら、葛藤や焦りなどの先に楽しさや嬉しさがあることが分かると、問題を乗り越える、自分に起こった問題を解決しようと探究する気持ちがもてるようになるのではないかと考えた。

V. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館
- 2) 岡山大学教育学部附属幼稚園(2017)『幼稚園教育と小学校教育の接続を図るための幼児期に生活していくために必要な習慣や学びに向かう力との関連性の検討を含めた「考える力」の育成を重視する教育課程及び教育内容・指導方法の研究開発』研究紀要第41集
- 3) 神長美津子・堀越紀香・佐々木晃編著(2018)『保育内容 環境』, 光生館
- 4) 六車美加・池田明子(2022)『幼児の探究心を支える保育の展開 -興味関心に応じた教材・用具との出会いと関わりに着目して-』, 就実教育実践研究 第15巻, pp.103-118
- 5) 宮里暁美監修(2018)『0-5歳児 子どもの「やりたい!」が発揮される保育環境』, 学研
- 6) 佐々木晃(2018)『0~5歳児の非認知的能力 事例でわかる!社会情動的スキルを育む保育』, チャイルド本社
- 7) 高山静子(2017)『学びを支える保育環境づくり~幼稚園・保育園・認定こども園の環境構成~』, 小学館
- 8) 河邊貴子・赤石元子監修 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編集(2009)『今日から明日へつながる保育 体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論』, 萌文書林
- 9) 岩立京子・河邊貴子・中野圭祐監修 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編集(2020)『遊びの中で試行錯誤する子どもと保育者 子どもの「考える力」を育む保育実践』, 明石書店